

「平和」という言葉は誰でも知っています。しかし、その内容についてはそれぞれ違った考えを持っているのではないのでしょうか。戦争を経験してきた人は、戦争がないことだけを考えるのかもしれませんが。これだけ差別や偏見がまかり通っているのにどうして平和などと言えようかと反論する人もおられるかも知れません。この「平和」という言葉を辞書で引くと「穏やかなこと・平らかに治まること」となっています。「平」はデコボコがないこと、「和」は行き過ぎも足りぬこともなく程良い状況だそうです。いかにも島国らしく、みんなが同じようにというのが平和だということなのでしょう。

旧約聖書で「平和」とはシャロームといいますが、辞書を調べると「完全・充分」、「福祉・繁栄」、「健全、堅実」、「正義・秩序」という意味なのです。つまり、聖書の語る「平和」とは、単に争いがなかったり、格差がないだけでなく、神の創造にふさわしい完全さを意味するのです。

「いわゆる正義の戦争よりも、不正義の平和の方がいい」と語ったのは井伏鱒二ですが、たしかにその通りでしょう。それは決して正義を軽んじているからではありません。戦争をしなければならぬ程の正義も、平和を破らねばならぬ程の不正義も人の世にはないからです。殺し合ってまでして守らねばならない平和など絶対にはないのです。わたしたちはいつからこんな錯覚をいだくようになったのでしょうか。軍事大国の他国への侵略を見るときそれが一番あらわになります。唯一の神を見失い、それぞれが小さい神に成り上がり、自己流の平和を振り回しはじめた時からでしょうか。平和こそ神の意志なのです。唯一の神を求める者には鮮やかにそれが見えるのでしょうか。おそらく預言者エレミヤは「平和とは何か」という本質的な問いを初めて見定めた人だったのかと思います。彼はヨシヤ王の宗教改革からバビロン捕囚初期までユダで活動した預言者です。今日の8章では、貴族が利益をむさぼり、預言者や祭司までが私利私欲の限りを尽くした格差社会でした。それは平和がないのに「平和」だとうそぶく社会でした。エレミヤはこのような自己批判もなく、反省も、過

去の過ちに対する悔いもない連中を徹底的に批判するのです。エレミヤの思想を端的に言えば、神の求められる平和とは、不自由のないことではなく、本来あるべき創造にふさわしい完全さを求めよということでした。つまり平和とは自らに問うことなのです。

「戦後」という言葉は各国にあって、それぞれの国でその後の方向を変えた大きな戦争のことです。例えばアメリカでは南北戦争だったりします。しかし、日本ではそういう意味の戦後がはたしてあったのでしょうか。戦前と同じ事をしようとする勢力は決して衰えず、いつの間にか日の丸・君が代が教育の現場に浸透し、平和憲法を改憲していつでも戦争が出来る国家を作ろうとする今、やはり日本には戦後がなかったと思わざるを得ません。8節で「我々は賢者といわれる者で、主の律法を持っている」とエレミヤは主に立ち返ることを最初に宣言しました。この主の律法を平和憲法に置き換えてみれば、今の私たちに深く問われる思いが致します。エレミヤが問うたように、罪に気づき、「信教の自由を守る日」を前に、もう一度本当の平和を求めて自分を立て直して行きたいと願います。